

新島八重さん

十八回生 小木曾（名田）文子

私の母は明治四十四年（1911年）五月生まれ、今年百二歳になります。

この母がNHKの大河ドラマ「八重の桜」の主人公、新島（山本）八重を指して「この人、知ってる」と云いました。女優さんではなくて、実在していた八重さんを知っていると云うのです。京都で生まれ育った母は、女学校に通う途中、しばしば八重さんの姿を見かけていました。八十歳前後、晩年のお姿です。

旧九条河原町別邸の跡地に建つ京都府立京都第一高等女学校（現 京都府立鴨 高等学校）は御所の東側の寺町通に面しています。校門を出て少し南に下ると新島裏の家があり、母は新島邸の前を通って通学するのが日常でした。

ある日、新島邸の門の傍に佇んでおられた八重さん

十世茂山千五郎正重氏は信仰の篤い方で、見事な狂言を神様に奉納され、この舞台を観に必ず八重さんは来ておられました。でも狂言が終わり、謡曲になると、いつの間にか中座して帰られたとか・・・いつも地味な着物姿だったそうです。

母は「こんなに長生きするとは思わなかったけど長生きしたお陰で、歴史に登場するほどの立派な人に出会っていたことが分かって・・・」と驚き、時々往診して下さる山東先生や訪問看護師さん、デイサービスでお世話になっている人たちに嬉しそうに八重さんの話をしています。

ちなみに母は河辺先生の頃から、千里山教会の信者です。そして千里山開発物語を寄稿した千里山人

（和田昌 故人）の妹です。

を見て、友達が「あの小母さん面白い人よ。お茶の先生やけど、槍や薙刀がすごく上手なんよ。それに、いっぱい昔の話をしてくれはるの。訪ねてみましょうよ」と誘ってくれました。

その時、母は咄嗟に「あの小母さんは耶蘇教の人や」と思い、断ってしまいました。

「今思うと惜しいことをしてしまいましたなあ」とつぶやいています。

当時のことですから、キリスト教を異端視し、毛嫌いする人が多かったことも事実でしょう。さらに5母の場合は、小学生のころ友達と近くの教会に遊びに行き、小さなお手伝いをしたことがあり、それを見た誰かに「神社の孫娘なのに教会にいた」と告げ口されたことがありました。それが母の足を引つ張ったのかもしれない。

新島邸の南、丸太町通を越して直ぐに下御霊神社があります。この神社は母の母、つまり私の祖母の実家です。毎年八月十八日に境内で篝火の下、狂言や謡曲などを催していました。近くに住んでおられた狂言師